

水トラスト ニュース

第2号

1999. Feb.



CONTENTS

「水源の森・みたけ」森開き

.....2

「水源の森・みたけ」の自然

.....4

中津川で汚水タレ流し

.....6

棚田の風景 宮澤杉郎

.....8

木曾川源流の村・木祖村

.....10

環境をドイツに学ぶシンポ報告

.....11

みたけ・500万人の木曾川水トラスト

口楽団の演奏あり、
出て……

フォルクロレグループ・キルキンチョ



皆で森開き

昨年一〇月三二日、御嵩町大久後の「水源の森・みたけ」で森開きの集いが開かれました。当日は好天に恵まれ、百人ほどの人が集まって森の中のひとときを楽しみ、セレモニーの後には散策道の整備などの作業も行われました。

オープニング・セレモニーでは水トラストの由井代表があいさつ、その後柳川町長が発言し、水源の森・みたけ宣言が確認されました。

好評だったのは、長谷川直美さんによる宮沢賢治の童話「虔十公園林」の

「水源の森・みたけ」宣言

木曾川は飛騨山脈南端の信州鉢盛山から湧き出る清らかな水を源に、かつては木曾五木を育み、日本の三大美林と呼ばれた木曾の山々に沿って急峻な谷を流れ下る。途中飛騨川と合流し、日本ラインを経て濃尾平野の広大な大地を潤す。そして、揖斐川、長良川を合わせ、木曾三川をなし伊勢湾に注ぐ。

この全長 232km、流域面積 9100km²、長野、岐阜、愛知、三重の4県を流れる木曾川の水は、上流と下流の人々、現代と次世代の人々、そして流域すべての生命あるものたちの、まさに「生命をつなぐ水」です。

近代の大量生産、大量消費、大量廃棄のシステムによって発展を遂げた社会は、今、私たちの「生命の水」である木曾川のありようにも問題を投げかけています。

'95年に突然もち上がった御嵩町の巨大産業廃棄物処分場計画は、私たち、現代社会が抱える問題の深刻さと同時に「環境」を基軸に今の時代の見方、考え方を変える必要性を強く発信する起点となりました。

産廃計画の是非を問う住民投票を通じて、木曾川を守るために敢然と立ち上がった御嵩町の人々と、木曾川流域の人々の心を結び証として、この森を共有し、「水源の森・みたけ」と名付けます。

私たちは、水を生む、山や森を守ることの大切さを知るためにこの森を交流の場とし、併せて隣接する小和沢の産業廃棄物処分場建設を止めるために、大いに活用し、更に運動の輪を広げる場とします。

今日、私たちは、森に生きる草や木、森に棲む虫や鳥や動物たちと共に「木曾川流域の水源保全」をこのせせらぎから木曾川へ送り出しましょう。木曾川流域圏自治体・住民の新たな協調体制を築く本流になれとの願いを込めて。

Wising Well Trust、ここに「水源の森・みたけ」を宣言いたします。



スズサイコの会の皆さん



柳川町長もかけつけてくれた



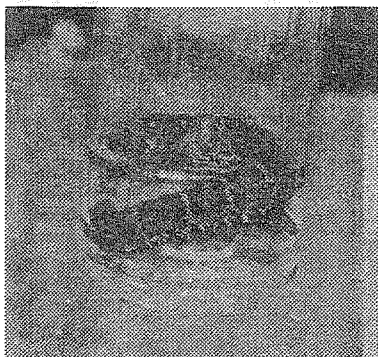
山仕事に詳しい人から作業前の説明を受ける

賢治の童話あり、チエ まむしの注意も

光と風の中



みたけ産廃を考える会の佐谷会長



まむしは干しておいて食べると美味いそうだが……

朗読と、これに合わせたチェロ、アコースティックギターによる賢治が作った曲の合奏。南米フォルクローレグループ「ギルキンチヨ」の音楽も愉快なものでした。

みたけ産廃を考える会の佐谷会長、大山のスズサイコの会、木曾川の水を



参加から

名水劣 野呂隆光

森の中でチェロがこんなに美しくひびくものかと思い、「度十公園林」を朗読された長谷川さんの声とともに聞きほれてしまいました。産廃を上流につくらせないことも大切ですが、産業廃棄物は原則として各工場毎に処理させる方向が必要だと思います。柳川町長レベルの人を県政、国政の中心におくり出せるようになりたいと思っています。

考える可児市民ネットワーク、名水劣、全電通東海中央支部、エコアクション・なごやもそれぞれ挨拶し、京都市で芦生の森の保護運動に取り組むチュラリスト京都からの発言もありました。

参加から

エコアクション・なごや 岡田薫

「美しい停滞」という創刊号の柳川さんの文章がありました。環境を守るといふことはこういう形でもあるのかと感銘をうけたのですが、先日みたけの森開きに参加して、大変手づくり的な作業を経験してみてこれが「美しい停滞」の一部ならなんて大変なんだ、と思いつつ、参加者の発言などから改めてみたけの森や世の中を美しく停滞させていくためにはいろんなことをやっていく必要があるんだと考えさせられました。

ふだん環境問題についてけっこう考えているつもりでも、それは机上のものであることも多々あります。人は遠い国で起きている戦争を止めたいと思っし、飢えてる子を助けたいと思うことができます。だから今はまだあるけど失われてしまいかもしれない自然を守るうと思っし、でももちろんできません。でも本当に守るためにはやっぱり行動しなくちゃ、です。百聞は一見にしかず。今回みたけの森を実際に見て、もつとたくさんの人にこの森のこと、みたけのことを知らせていきたいと思っししました。

今度はぜひこいつしよしましよ。



水源の森の自然

by 武奈明

「水源の森・みたけ」には、東海地方を代表する里山の雑木林の姿が残されています。

ここで見られる森は、原生林を人間が利用するために何度も伐採してきた後に、自然にできた森（二次林という）です。所々に、根元から何本も株立ちになった木が見られるのは、その名残です。二次林には、多くの種類の植物が生育し、それを餌とする昆虫も種類数・個体数ともに豊富です。当然、それらを餌とする野鳥や哺乳類なども数多く生活できる訳です。そんな素晴らしい森を、簡単に紹介しましょう。

森の一番高い階層（高木層という）は、コナラとアベマキが圧倒的に優占し、ヤマザクラ・ホオノキ・アカシデなどが混じります。これらの樹木は、すべて落葉広葉樹です。加えて、尾根筋の乾燥地では、アカマツが多く生育します。木々の高さは、一五m〜二〇mに達します。

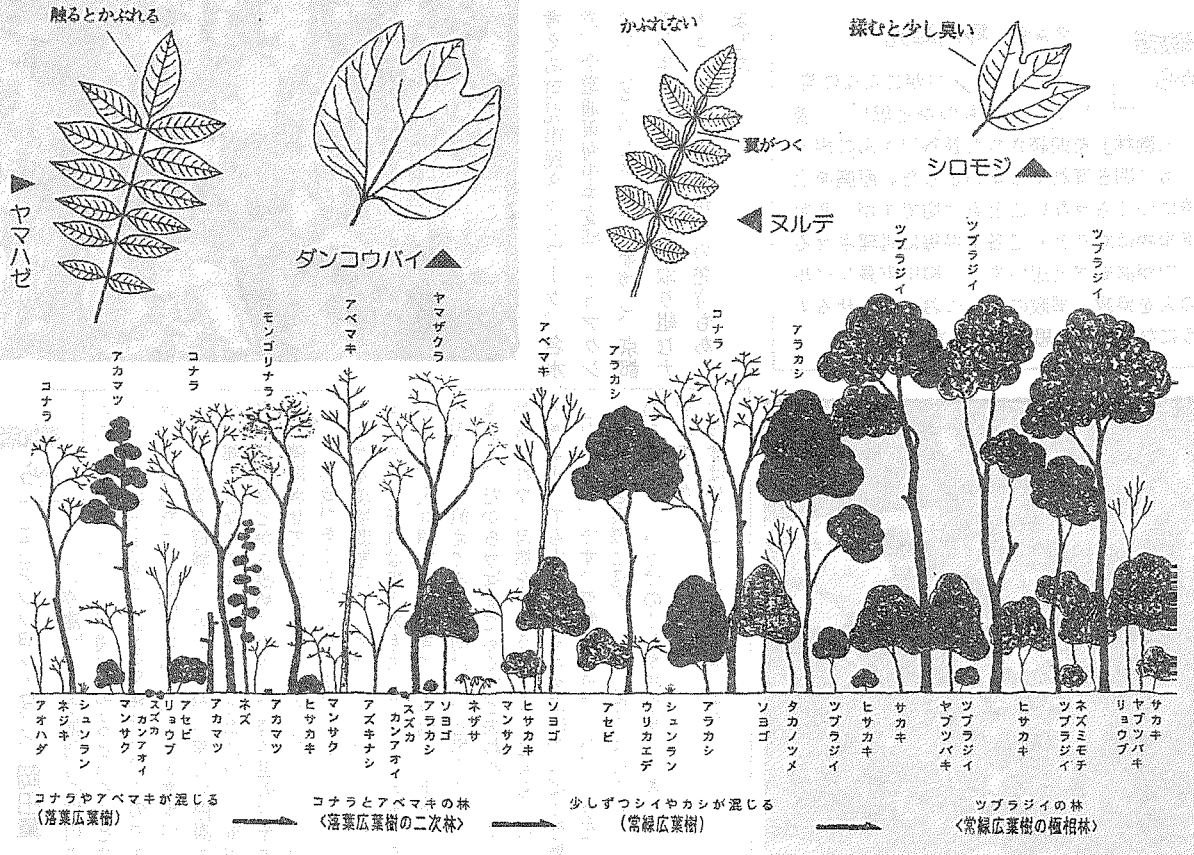
その下には、五m位の高さまでの背が低い木の層（低木層という）が

あります。シロモジ・マンサク・ガマズミ類などの落葉樹と、ソヨゴ・アセビ・シキミなどの常緑樹が生え、数多くの種類の樹木が見られます。これらの木の多くは、成長しても低木のままで終わる種類です。また、所々に、次代の森の主役であるアラカシの稚樹が見られることは、注目に値します。

さらに、地表近くには、草本植物の層（草本層）が見られます。この草本層は、尾根筋の乾燥地ではシュラン・センブリなどわずかなのに対して、沢沿いの湿った所で良く発達します。今回の調査では、有毒の朱色の実が目立つスルガテンナンシヨウ、いつも水がしたたる所に生えるミズタバコ・ネコノメソウ類、

深山で多く見られるヤマジオウなどが確認できました。これらの植物の中には、比較的珍しい種類も含まれており、これからの詳細な植生調査の実施が期待されます。

「水源の森・みたけ」だけでも、最終的には二〇〇種類程度の植物が



見つかるものと思われず。

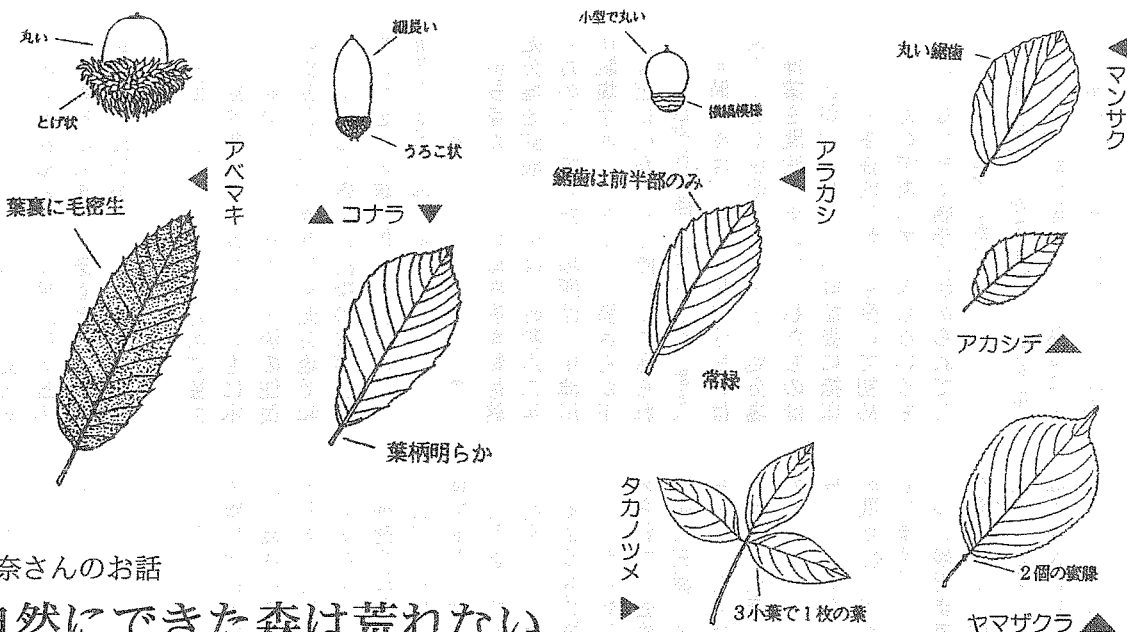
こうした里山と入口付近にある水田周辺を含む地域は、多様な自然が存在するため、野鳥の種類も豊富です。今回は、ツグミ・ルリビタキ・カワラヒワ・アオゲラなど一九種類を確認しただけですが、一年を通して、数多くの野鳥が生活しているものと思われず。

哺乳類では、ニホンリスとテンの生活痕を見つけることができました。特にアカマツの樹下には、ニホンリスがマツボックリの中の種子を食べた残りを捨てたもの（通称：リスのエビフライ）がたくさん見つかりました。

森林としてはわずかな面積ですが、実に豊かな自然を誇る森、それが「水源の森・みたけ」です。これからも、この多様な自然が残されることを願います。



スルガテンナンシヨウの実



武奈さんのお話

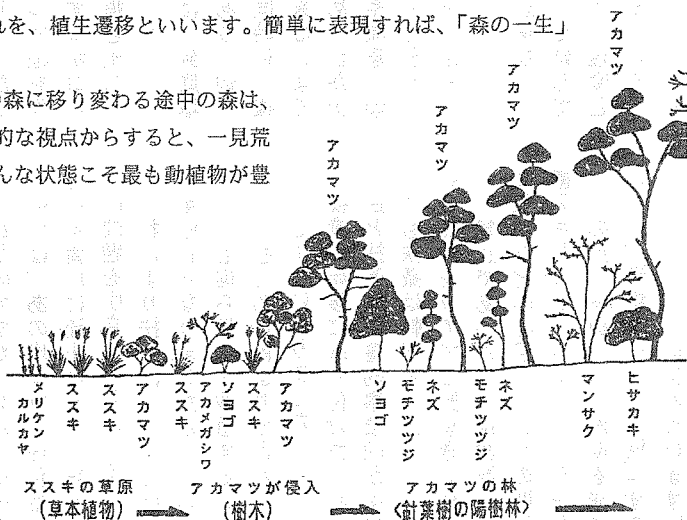
自然にできた森は荒れない

人間が植えたのではなく、周辺から種子が飛んできたり、もともと地中にあった種子が発芽してきた森は、決して荒れることはありません。下の図のように、自然にできた森は600年~800年もかかって、自然に植物の種類が移り変わっていきます。これを、植生遷移といいます。簡単に表現すれば、「森の一生」といえましよう。

たとえば、コナラ・アバマキの森からアラカシの森に移り変わる途中の森は、多くの種類の落葉樹と常緑樹が雑多に生え、人間的な視点からすると、一見荒れているように見えるかも知れません。しかし、そんな状態こそ最も動植物が豊かに育まれ、生命あふれる姿なのです。

100年もすれば、自然淘汰により絶える種類は絶え、アラカシを主とした林に姿を変えていることでしょう。

大切なのは、人間の視点で森を見るのではなく、森の一生の中での今と未来の姿を考えると、いう基本的スタンスです。あくまでも自然が中心で、人間はその一部を利用してもらうという気持ちを、忘れないようにしたいものです。



中津川で汚水の夕レ流し！

(有)扶桑 管理型産業廃棄物最終処分場の実態

昨年暮、水トラストの事務所に中津川のTさん一家がたずねてみえた。話を聞くと、自宅のそばの産廃処分場で大変なことが起きているという。事態の深刻さを伝えられ2回にわたって現地を訪れた私たちの前に現れたのは、聞いた通りの悪臭と汚物の山だった。これはとまかなんとかしくなくてはいけない。この問題については今後とも取り上げていくが、まず号にTさんからよせられたレポートを掲載する。

皆さん、中津川の扶桑処分場と言われても、なかなかご存じではないかと思いますが、平成三年に処分場の堤防を決壊させ、木曾川に大量の廃棄物をぶちまけた業者と処分場と言えば、思い当たる方も多いかと思えます。

今回、「水トラスト」さんのご協力と理解を得ることができ、ともに木曾川を守っていくべく、上流の住民の責務として、現在扶桑処分場で起こっている木曾川の汚染の事実と実態につきこの場を借りて皆さんにご報告しようと思えます。

* * *

(有)扶桑が、ここに産業廃棄物最終処分場を開設したのは、昭和六二年九月のことでした。場所は、中津川市駒場字西山、ちようど皆さんが下呂などに向かわれる際によく通られる、市営有料道路の付近にあります。

当時扶桑は、私たち地区住民には何ら十分な説明もありません。処分場の操業を開始しました。私たちのほとんどが、区長から「同意書に捺印した」と事後的に報告を受けて初めて知ったのであつて、知らないうちに知らない所で勝手に決められてしまっていたのです。

以来、現在に至るまでの十余年間、私たちは、処分場から出る悪臭やカラス等の被害、そして何より、現在

社会的問題となっている化学物質に悩まされ、精神的にも肉体的にも、被害を被つて参りました。

というのも、処分場は、木曾川に面して設けられているのですが、傾斜地にあるため、搬入された廃棄物は、傾斜の底部たる木曾川に向かって流動してしまい、かろうじて堤防で喰い止めてはいるものの、堤防と同じ高さにまで廃棄物は積み重なつてしまつていました。廃棄物と言ってもそれは、何年も前の、何度も異常発酵を繰り返し、もはや原形もとめていないようなドロドロした物体であり、浸出液も溜まつて池を作つてしまつており、たえずゴボゴボと泡を立てては、ガスを噴き出していろいろな状態だったのでした。

そこから発生する悪臭は、到底堪えられない強烈なものであり、辺り一帯に充満しています。同時に、複合生成してもはや特定出来ないようなガスも充満しているため、目がチカチカしたり、喉の痛みや喘息、頭痛、吐き気などを訴える人も多く、時間が経つてから症状が出て来る人もいます。

つい最近までは、この悪臭ないし有毒ガスが、地区内にまで蔓延しており、堪えかねた私たちは、幾度となく扶桑に対し、覆土をするよう要求してきました。

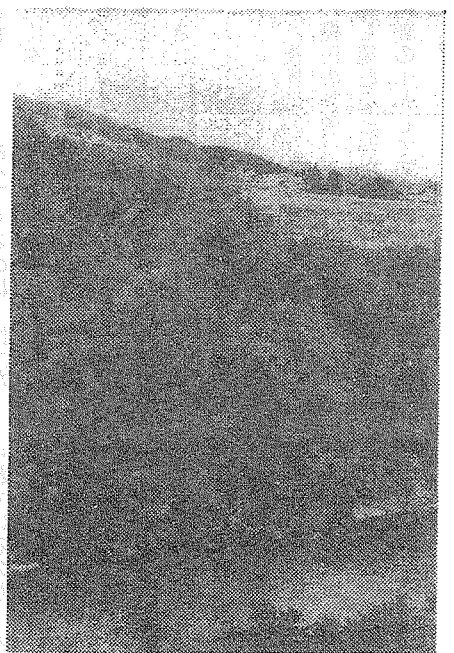
そもそも、扶桑が、維持管理基準法に従い、廃棄物に適切な処理を施していれば、ここまでひどい状況には、決してならなかつたはずでした。市との協定書にも明記されている通り、扶桑は廃棄物はサンドイッチ工法にして覆土処理しなければならぬのに、また、県からも同様の指導を受けているにもかかわらず、皆さんの管理しかして来なかつたのでした。

平成三年九月に一度、私たちの覆土請求がやっと届き、一応覆土は実行されたのですが、なんとその二ヵ月後には、あの廃棄物を浄化槽もろとも木曾川に流出させると言う、社会的問題を引き起こしたのでした。

これにより扶桑は、一ヵ月ほどの営業停止となりましたが、その後ににおいても何ら反省・改善することなく、むしろ以前より皆さんの管理をするようになりました。

操業開始後に取り付けた、私たち住民と扶桑との誓約事項四か条についても扶桑は軽がると違反し、もうもう黒煙を立てては野焼きを繰り返して、禁止であった県外廃棄物や動物性残さなどの品目も、いつの間にか搬入されるようになっていました。

この点、扶桑に対し釈明を求めたところ、野焼きについては、「すみませんでした。以後気をつけます」と



上の方に見えるのが(有)扶桑の処分場。
すぐ下を木曾川が流れる。

すると扶桑は今度は、「(溶融炉の)話し合いによつては、覆土してやってもいい」などと、権利と義務を履き違えているのか、まるで脅迫まがいのことを言つて来ました。

扶桑社長は、ゴミの処分につき、「覆土は間違つた方法であり、溶融炉で理想的な処分をして行きたい」旨大義名分を掲げておられました。私が、「ぶっちゃけた話、儲かるからやるんでしょ」と訪ねたところ、「まあ、そうだとはいさきり答えていました。

仮に、百歩譲つて、扶桑の提唱する溶融炉が魔法の釜であるとしても、その安全性は、その業者で図るべきだと私は思います。

どんなに安全と言われる高級な車に乗つていたとしても、それを運転する人がずさんな運転をしていけば、事故は必ず起こる、というのが同じだと思ひます。

なお、溶融炉はドイツでも、度々爆発事故を起こし、完璧なものがないと言われるほどのものであり、危険なものであることに、変わりありません。

このように、溶融炉と処分場のことで皆が戸惑つている間、昨年(平成十年)九月に、扶桑が再び、処分場の堤防からどろどろの廃棄物や汚水の池を大量に溢れさせ、木曾川に

流出させたのです。それは、浄化槽も通らず、直接木曾川に流れ込んだのでした。公にはなりませんでしたが、扶桑は翌日には堤防をかさあげしてしまいました。

現在、扶桑処分場は、上からピニールシートで密閉されていますが、側面と底面の遮水シートは破れ、完全になくなつている所もあり、土壌はずつと汚染され続けています。その土壌から流れる汚染された地下水は、傾斜を下り、堤防をくぐり、そのまま木曾川に注がれています。

残念ながら私達は、この様な木曾川の汚染を目の当たりにしながらも努力が及ばず、皆さんの力をお借りして、木曾川を守つていきたいと思つています。

解説 糸土センセに聞く

Q. こうした問題に対する法的な規制はないのですか？

A. 水質汚濁防止法で排水基準が定められています。木曾川のような清澄な川へ排水する場合には、更に厳しい上乗せ基準が適用されます。ところが、産廃処分場からの排水については適用が除外されていて、廃棄物処理法が定める大甘の基準でよいとされています。この国の悪しき縦割り行政の欠陥と、産業保護の姿勢が最大の問題です。

謝罪するだけで終わっており、搬入物については、扶桑は私たちには内緒で、いつの間にか県の許可を取つて品目を増やしていたのです。そして、私たちが最も気に掛けていた「処分場の期限」については、誓約では「十年間もしくは満杯になるまで」とされており、誰もが十年の我慢だと堪えていたところ、扶桑は、「まだ七割であつて、終わるのはいつになるか判らない」旨返答してきました。

本来、扶桑が維持管理基準法や協定書等に従つて、きちんと覆土処理を行なつて来ていれば、今のようにならぬ廃棄物が地中に吸収されかさが減つていくこともなく、十二年目に入る今頃には、満杯にはなつていたはずであると思われれます。

私たちが、扶桑に対し、ただならぬ憤りと不信を感じる中、今度は扶桑は「溶融炉」の処分場を、既存の処分場の隣に作りたいたいと言ひ出しました。

私たちがすれば、既存の処分場の管理もろくにせず、住民の健康の配慮などまったく鑑みない会社になりましてや溶融炉など任せられないのも当然のことでした。

扶桑は溶融炉施設の建設に躍起になつており、試験炉を設置し、住民に対し、説明会を開かせると迫つて来ています。

私たちがすれば、既存の処分場の覆土の話し合いもついでにないのに、なぜ新しい処分場開設の話が聞かなければならないのか、順序が逆でしょうかと思われません。

棚田の風景

宮澤杉郎

画・長良茂生

僕が住み暮らす八百津町潮見では、多くの人家が、標高五〇〇メートル前後の山地の上にある。「山仕事へ行く」と言えば、ふつうは家を出て高い所へ登るものだけれど、こちら辺りでは、家よりも低い森へ下りて行くことになる。この人たちは、町へ出ることを「下（しも）へ行く」と言う。

下へ行くには、主に二本の道が利用されている。西へ下りるのは、巨大な丸山ダムのダムサイトをぬけて、八百津の町なかから岐阜や名古屋などの都市へ向かう道。一方東へ下りるのは、惠那へ出てさらに山間地へ向かう僕的好きな道だ。

この道を行き、森をぬけて最初に出会うのが、中野方町坂折の集落だ。開けた視界に広がるのは、美しい石積み棚田の景色。正面には、笠置山の全容を望むことができる。古来、雨乞い祈願の山として知られている山だ。麓

に散らばる集落の屋根が光っている。炭焼きの窯から立ちのぼる煙も見える。緑の早苗が風にそよぐ頃も、金色に光る稲穂が刈り取りを待つ頃も、風花が舞う冬枯れの頃も、いつでもこの景観は心にしみる。

この坂折の棚田には、五五四枚の田が段々となつて広がっている。その一枚一枚が、精緻な石積みによつて支えられているのだ。人家も、斜面のあちらこちらに、がっしりとした石積みの上に建てられている。この棚田の中には、名前がつけられているものもある。「化粧田」「田の神田」「紺屋田」などだ。中には「ねむの木」とか「八升時」なんていう名を持つ田もある。

棚田が成立した年代は、現在おこなわれている学術調査の結果を待たないと正確なことはわからない。学者によると、一六〇〇年の関ヶ原の合戦の時代の石組み技法が見られる部分がある

という。驚かされるのは、明治時代初期におこなわれた検地の記録と現状が、ほとんど変わっていないということだ。数百年にわたつて、耕作が営々としておこなわれ、今もなお同じ水田で米づくりがされている。背後の見行山に源をもつ伏流水が、棚田のしき（水が漏れないように突き固められた田の底）の下を流れ、段々となつた斜面のところでころから湧き出して、下段の田を潤している。惠那先史文化研究会が作ったリーフレットの文章が、坂折の棚田が与えてくれる感動を次のように伝えている。

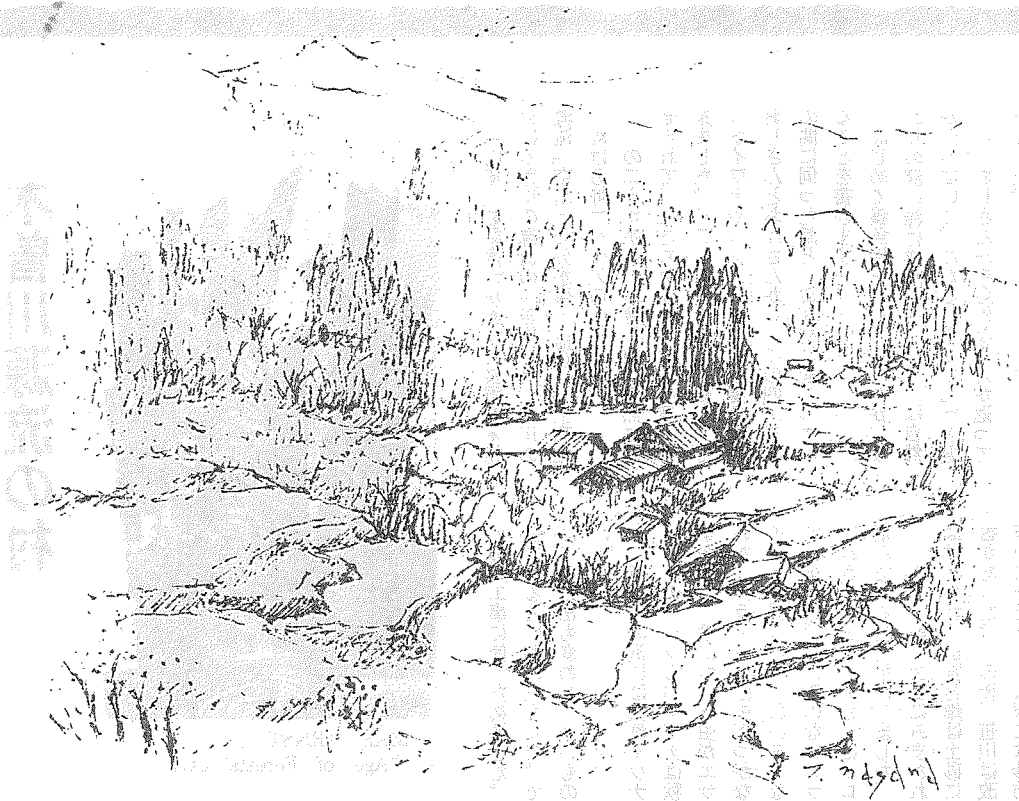
『水をはった棚田は、鍬一丁で塗りあげた畔の線で区切られて、太陽に輝き、月も田面にうつします。この景観は、自然と人間の合作による見事の一言につきます。しかし、この棚田を築きあげられた苦労と、これを守つて生き抜こうとされる坂折の方々の苦労に

は、唯々頭が下がります。

この赤河断層にそう崖錐地形の土地で、土壌の流出と侵食をくいじめ、下流を水害から守つてきた。いつてみれば、国土保全の役割をはたした棚田を、地域の総力で守つていきたい。棚田は無言の偉人です』。

近代的なダムによる治水・利水とは全く異なる昔ながらの知恵の結晶が、この棚田にはある。

さて、中野方町から北へ向かえば飛騨へ、南へ向かえば奥三河へ、さらに東へ向かえば木曾へ続く道だ。僕はほんの時おり、友人を訪ねた帰りなどに、これらの道を遠まわりしてみる。軽トラックを走らせて、ありふれていながらそれでも一つ一つが違う農山村の集落を通りぬけて、いくつもの峠を越える。排気ガスをまき散らすことに忸怩たる思いはあるけれど、切越峠、遠ヶ根峠、胡摩草峠、桜峠、地藏峠、声に



出してみても美しい名を持つ峠が僕を誘うのだ。

麓から峠近くまで続く小さな段々畑や棚田や古い民家を、勝手に見せてもらうだけでもおもしろい。色んな工夫がしてあることがわかる。廃校跡を見つけると、校庭に入ってみる。イチヨウやカシの大木の幹の太さを、腕で測ってみたりする。通りすがりのおばさんが、見知らぬ僕に会釈をしてくれる。できればそんな人たちと親しくなりたいたいと思っただけでも、せいぜい一言二言の言葉を交わすだけだ。

十代の終わり頃から山歩きに熱中していた時期があった。僕は、峰の頂きを踏むことよりも、その行き帰りに通りすぎる奥秩父や利根川源流のつましやかな山里に、心ひかれていたことを思いだす。まさか町を遠く離れて百姓になれるとは、考えてもいなかった。

山里のたたずまいが、季節を問わずに人の心をひきつけるのは何故だろうか。それは、美しい景観を持つ農山村には、農的な暮らしが確かに息づいているからだ。近代の文明が袋小路で行きづまり、この国では、経済成長一辺倒の時代に根をもつ病が吹きだしている。そんな今、便利さやモノの豊かさを離れたところにある、現在とは違うもうひとつの生活と社会のあり様が語られ始めた。

私たちが見失いかけているそのモデルは、どこにあるのだろうか。東南アジアにあるという人がおり、沖縄にあるという人がいる。その通りだろう。でも、もつと近くにも目を向けてみたい。僕は、自給を生活の根っこにした、ごくあたりまえだけれどまっとうな農的な暮らしの中に、そのモデルを探ることができると思っている。

残された時間は多くはない。坂折の棚田でさえ、周囲から耕作放棄が進み、杉や松が植えられた田もある。圃場整備をして一枚一枚の田を広げ、機械を使いやすくしてほしいという要望も出されているという。それでも、僕たちが学ぶことのできる確かなものが、まだ残されている場所がある。

たかだか一〇年の百姓のキャリアしか持たない新参者の僕には、残念ながら、残されている暮らしの知恵を自らのものにする力が、まだない。ともあれ、僕は“野”へ出ていく。野は、働く場であり、遊びの場であり、学びの場であり、魂を解き放つ場であり、私たちが最後に還って行く場だ。

野へ出れば、あらゆるものが、気が向いた時にむこうからこちらへ近づいて来てくれる。それをありのままに受けとめるために、僕は耳を澄ませ、目をこらす。

木曾川源流の村



MAX ERNST
"Age of Forests" Style.

大隅良務

中山道「萩原宿」があった長野県木祖村は木曾川の源流の「笹川」と、梓川の源流「奈川」の分水嶺・「境峠」（土高地へぬける峠）への入口の村です。

この二十年余り、木曾の山の自然に魅せられて、私たち家族はこの村へ通って来ました。そこに通ううちに、親しくなつたイワナやニジマスを育てる養魚場のおじさんとおばさんから、この四・五年の間に伺った話と、現在村に起こっていることを書きます。

はじめて養魚場を訪れた私たちが、まわりの深い緑に感激して、「ここは自然がいっぱいで、心がなごみますね」と言うとき、おじさんから意外な答えが返って来ました。

「このあたりの木は、戦後、国の指導で、もともとあったシラカバやブナを全部伐り、植林したカラマツだよ。川や海

の護岸工事に使うため植えた。三十年で金になるといわれたもんだ。でも、今では工事方法も変わり、使いものにならな

い。」
「昔、この沢には天然イワナがいっぱいいたよ。シラカバやブナは秋になると葉が落ち、葉についた虫がエサになっていた。カラマツには虫がつかないから、イワナも減った。かわいそうなことをしてしまつた。使い道のないカラマツは、これさ…」とおじさんはイロリの横に積んである薪を手にしました。

「十数年前に台風にみまわれ、村の道は寸断され、田圃と畑は土砂に埋まる被害があつた。その後、笹川は改修され、笹川にそそぐ小さな沢には砂防ダムが造られた。しかし、いまダムは土砂で埋まっているよ。いづれまた被害が出る」と心配していました。

九四年は、木曾川水系に限らず、全国的に水不足で騒がれました。そんな中、村のもう一つの木曾川源流の味噌川には都会へ水と電力を送るために、水資源開発公団の味噌川ダムが完成しました。イワナの養魚場の前にある尾根の土砂は、ダム建設用に運び出され、あとは、高原野菜の白菜畑となりました。その畑には、スプリンクラーで水を撒くのです。しかし、取水する沢は昔より水量が減つて、夏には水を撒くにも困っています。なんと、都会（下流域）に水を供給する木曾川源流の村にも水不足があるのです。

これらのことの原因は、カラマツ・スギなど単種の木が被う山は、保水能力を失つてしまつているからです。雨が降れば、雨水は一度に溢れ、土石流が発生し、一方、夏には水不足となるのです。加えて林業に従事する人が不足して、山が荒廃していることも影響しています。山間の木祖村の過疎は、ますます進んでいます。村のお年寄りが、「村に子供がいなくなる」と嘆く言葉に表れています。

九七年の夏、笹川沿いに境峠に至る県道二十六号線が山道にさしかかり、集落が切れたあたりの河川敷に、今までなかったトタンの塀が何かを囲んで造られているのに気がきました。囲いの中からは煙があがり、ウンボの腕がさかんに動いていました。まわり一帯は化学製品を燃やしたような臭いがします。その年の秋にも、煙が立ち昇り、下の集落でも臭いを感じました。私は、村役場の衛生課(?)を訪ね、責任者に伺った話では、村内の

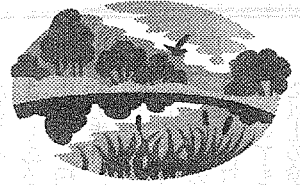
会社がしていることで、会社は「自社処分として焼却をしている。焼却灰は適切な処分場に運んでいる」また、「十二月には、そこから数百メートル上流の新しい焼却炉で燃やす」ということで、村と会社は、すでに協定書が交わされたとのことと聞かされました。ちょうど、廃棄物の焼却によるダイオキシン汚染が、大きくマスコミに報道されたり、廃棄物処理法の改定がなされ、野焼きが出来なくなる時期でした。この焼却炉からは、私が、九八年冬・春・夏、そして、この十一月二十五日に訪れた時にも、四六時中、煙が昇っていました。

皮肉なことに、焼却炉は、観光用に公開し始めた、村に唯一残された「水木沢天然林」の入口で、笹川に架かる橋を渡つた河川敷のカラマツ林の中にあります。また、その下流百メートルには「小木曾簡易水道」の施設があるのです。

これら、過去から現在まで、この木祖村に起こっている出来事は、都市に暮らす私たちに多くのことを問いかけています。私たちはそれに気が付き、早く対策を考へるべきだと思います。

九五年の夏、「村は、二十数年前に先祖の畑を養魚場のイケスにした俺を、批判した。それに、山の木と谷の水の大切さを訴えた俺の言葉に耳をかそうとしなかった。水不足で初めて村長がこの谷に来た。やっど、俺の話の聞いてくれたよ」と言つたおじさんの顔が少し明るくなつたように、私には見えたことを憶えています。

日本の伝統的暮らしの中に 循環型社会のヒントがあったのでは



11・23環境をドイツに学ぶシンポ in 御嵩

報告:小西和子

御嵩町の産廃運動にかかわって下さった下流の方々にはお馴染みとなった中公民館で、昨年11月23日「環境をドイツに学ぶシンポジウム in 御嵩」が開催されました。

まず、9月に近隣の首長達と共にヨーロッパへゴミ行政の視察に行った柳川町長の報告がありました。町長はフライブルク市の廃棄物の埋め立て地に行ったそうですが、そこで働く行政の人たちでさえ埋め立てには問題があるという意識を持っていたこと、また徹底した減量努力をしたあけく残ったゴミだけがそこへ運ばれてくることなどに感心したと話していました。こうして行政の長が本気になって環境行政を学ぼうとしていること、これはほんとうに画期的なことではないでしょうか。他の首長さん達の感想も聞いてみたいものです。現場へ行って体感してくるというのはとても大切です。

続いて登場は、今泉みね子さん。水トラストメンバーの7人までが、一昨年のエコ・ツアーの際、フライブルク市で案内・通訳でお世話になった方です。今回は産廃や一般廃棄物の量をいかに減らすかというフライブルク市の様々なアクションを話して下さいましたが、御嵩の自然の豊かさにもふれ、一見豊かにみえるドイツの自然よりうんと上質な自然が残っていることを強調して下さいました。豊かな自然に囲まれている住民は、応々にしてそれに気づいていないとも……。

日本人が実は忘れて捨ててしまった伝統ある暮らしの中に、今ドイツで環境に先進的なこととして行われていることがあったりするのだということ、ちょっと前の日本ではあたり前だったことで、環境に負担をかけない知恵がたくさんあったのではないかと今泉さんはおっしゃっていました。大人も子供もただ頭で考えるだけではダメで、心に響いていないと習慣として根づかない、何よりも楽しみながら生活することが重要なのであるとも。

次に登場したのがアクセル・マイヤー氏。ドイツ環境自然保護連盟(BUND=通称ブント)の南オーバーライン支部事務局長であり郡議会議員でもあるそうです。

のっけに彼が大きなスクリーンに写し出したのが桜？

の古木の日本画……？ 中央縦に大きく「緑・人」と入っていて、日本人へのメッセージなのでしょう。

ドイツでは中世に森を伐採して、針葉樹で復元したので、実質は貧しい森だそうです。それでも、森林がまだかろうじて生きているのは市民の力だと彼は言います。

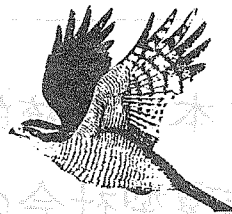
30年前はドイツのゴミ処理も今の日本と変わりが無かった様子をスクリーンに示しながら、市民が変えていったゴミ行政、反対ではなく提案もしていく運動を展開しているBUNDの姿勢、消費生活以外にも楽しい暮らしがあるんだというビジョンを示しながらの展開、行政と組んでのアクションや巨大資本に巻き込まれないよう中小企業とBUNDが組んで活動している事など、興味ある話が続きました。

ただ今泉さんによると、実は彼はフライブルク市の環境行政には批判的な立場で、日本でフライブルク市だけが理想のように言われるのを聞くと忸怩たるものがあるようです。私は俄然、マイヤー氏に興味が湧いてきましたね。

マイヤー氏はゴミ行政においてドイツが進んでいるとは言いたくない、各国独自のやり方で工夫ができるのではないかと言うのでした。ドイツ人が日本人ほど無批判的に消費生活に流されないことの根底には、ドイツ人としての文化(個性)への誇りがあるようです。「誇り高く環境問題を考えて下さい」というメッセージは、日本古来の良質な部分である文化というものを私の内に思い起こさせてくれました。

会終了後、今泉さんと立ち話をする機会がありました。短い時間でゴミ行政だけを語るのには、不本意なものがあったようで、環境教育他もっと大きな視点でじっくりと話したい気持ち、ウン分かります。あくまでも今泉さんやマイヤー氏は市民の側からの眼で発言している人だと再確認し、身近に感じつつ、満たされた気持ちで家路についたのでした。いつか又今泉さんやマイヤー氏と語りあえる日が来たらいいですね。皆さん！

(こにしかずこ・御嵩町在住)



寿和工業への土地売却認可をめぐる

御嵩町民水トラストで 岐阜県へ申し入れ

一月二三日、岐阜県は御嵩町の産廃処分場を計画している寿和工業が国土法に基づき新たな土地の買収を県に届け出ていた問題について、

「住民投票の結果は判断の基準にならない」としてこの届出を適法と認める判断を下した。この届出には御嵩町の意見書が添えられ、「住民投票で町民の八〇%が反対している」「周辺地域にはオオタカの生息が確認されている」などの理由から土地取得は不適当との見解が示されていたが、県はこれを顧みず認可を出したのだ。

この問題をめぐって、一月二三日には御嵩町の小栗議員、生駒直美さんと水トラストの代表由井滋さん、宮下益一さん、大隅良務さんの五人が岐阜県庁を訪れ、抗議と要請を行った。

まず六階の企画部地域振興課では、今回の認可が処分場の計画地内なのかどうかを尋ねたところ、計画予定地四〇ヘクタールの中の土地であるとの回答があった。この判断は住民投票の結果の重さを考慮していないのではとの指摘に対しては、「県としての仕事なのでやむをえない」との一点張り。

ここで寿和は第三セクターでも良いと言っているとの話が出たので十階の環境衛生部産廃廃棄物対策課へ行って第三セクターの出身についても質問したが、県の調整案に出された以上の検討はしていないとのことだった。いずれにしても行政的手続きをめぐる回答以

上は残念ながら得られなかった。

すすむオオタカ保護の動き

問題になってくるのは小和沢周辺でオオタカの生息が確認されていること。これは過去二年間にわたって犬山の「スズサイコの会」と「みたけ産廃を考える会」が野鳥観察を続けてきた結果明らかになったものだ。オオタカは環境庁のレッドリストで絶滅危惧種Ⅱ類に分類されている。このため岐阜県も無視できず、今回の寿和への認可に際して、オオタ

カの調査を求める行政指導を行ったのである。しかし業者任せの生息調査などまったくとってつけたようなもの。

御嵩町ではこれに対して町や住民によるオオタカ保護の動きが強まっている。

一月二三日には「オオタカを護る会(仮称)」の準備会が旗揚げした。町も職員八人のプロジェクトで蜜猟防止などにあたっている。

水トラストとしてもこの動きについて注目し、本紙でも紹介していききたいと思

第2土曜日は水源の森で…



2月のみ14日(日曜日)、以降毎月第2土曜日(3月13日、4月10日、5月8日…)に水源の森・みたけで自然観察や散策道づくりなどを行います。2月からはシタケ栽培を始めます。2月14日はほだ木づくり、3月13日に菌うちです。集合は毎回朝10時に中公民館駐車場。子供連れの参加も歓迎です。あなたも休日を森の中で過ごしませんか?

はい、水源の森・みたけが動き出しました。4頁の「水源の森の自然」は武奈さん自筆のイラスト入りです。宮澤さんの頁の挿絵は御友人の画家・長良さんが描いて下さったものです。皆さんどうもありがとうございました。次号もまた色々な方にお預りしたいと思います。どうぞよろしく。(森下)

MITAKE
Wishing Well
Trust

水トラストニュース第2号

1999年2月10日発行

みたけ・500万人の木曾川水トラスト

〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬町

2-28-14 tel.&fax 052-682-5204

水源の森・みたけの出資者になって下さい

水源の森・みたけは皆さんの出資により運営されています。すでに地権者の方の御好意で使用させていただいていますが、まだ購入資金は不足しています。是非多くの方の出資をお願いします。1口2000円。何口でも結構です。

< 振込先 >

郵便振替 00800-9-64810

みたけ・500万人の木曾川水トラスト宛